

野口芳宏著「野口流 教室で教える音読の作法」学陽書房、2012 年 3 月 26 日刊を読む

野口流 教室で教える音読の作法

1. 音読はすべての学習の基礎—音読は、勉強好きになるかどうかの分かれ道—

- (1) 学力の基本は、「読・書・算」、つまり「読み・書き・計算」です。これは、古今東西、変わることもない真理です。読めて、書けて、計算することができれば、日常の一通りの用は足すことができます。逆に、それができなければ、日常生活もままなりません。
- (2) すべての学力は、この三つの基礎のうえに成り立ちます。そして、この場合の「読」というのは「音読」であって、「読解」ではありません。
- (3) 文章を「音読」するには、まず「文字が読める力」が必要です。文字そのものは、黒いしみの連続にすぎませんが、そのしみの形を細かく見分けて、文字を認知しなければなりません。
- (4) さらに、その先に「言葉として読める力」があります。認知した文字の連なりの中から、言葉を拾い出し、文脈を汲みとっていくのです。
- (5) この二つが揃ったとき、「読み」の基礎が完成します。そして、この基礎があつてこそ、すべての教科学習に進むことができるのです。
- (6) 音読を練習することによって、文字の連なりの中から文脈を汲みとる力を伸ばしていくと、勉強に対する抵抗がなくなります。
- (7) しかも、音読活動の特徴として、その上手下手がクラス全員の前で明らかになる、という点があります。
- (8) すらすら音読できると、友だちから認められ、自信がもてます。文字を読むことが楽しくなり、自発的に本を読むようになり、勉強好きにもなります。
- (9) その反対に、音読が下手であるために、友だちの前で恥をかき続け、やがて文字嫌い、勉強嫌いになってしまう子どももいます。実際、子どもが「勉強が苦手だ」という自覚をもつきっかけは、音読のつまずきにあることが多いのです。
- (10) 上手に音読できるかどうかは、子どもが勉強好きになるか嫌いになるかの、分かれ道でもあるのです。音読活動をどのように体験するかは、その子の学習生涯に大きな影響を及ぼすのです。
- (11) 子どもが音読に苦手意識をもちそうになったら、個別指導によって問題点をクリアさせ、上手になったところをほめましょう。幸い、音読は練習の成果が現れやすく、上達が耳ではっきりわかりますから、自信の回復に大きく役立ちます。

(12) 子どもに自信をつける音読指導をしよう

2. 課題の多い子どもの音読—音読の基本を知らない子ども—

- (1) 現状を見ると、残念ながら、子どもの音読は総じて問題が多いものです。教室を回って子どもの音読を聞くと、しばしば落胆させられます。
- (2) たとえば、次のような問題点が気になるからです。
- ① 声が小さくて、聞きとりにくい。
 - ② 口を大きく開けず、発音がはっきりしない。
 - ③ 声に張りが無い。
 - ④ 読み方が速すぎる。
 - ⑤ 一本調子で読み方に表情がない。
 - ⑥ 句読点や段落を無視して、「間」を置かず^まにずらずらと読む。
 - ⑦ 文章や文脈についての配慮がない。
- (3) 要するに、音読の基本が、できていないということなのです。
- (4) 子どもたちの音読を聞いていると、「どうすれば上手に読めるのか」という目的意識がほとんどないように感じられます。
- (5) 「よい読み方をしよう」という目的がなく、無自覚、意意識にただ文字を追って声に出しているだけなので、漫然とした読み方になるのです。そういう子どもたちは友だちの音読に対しても、積極的な関心を示しません。唯一関心を示すのは「読み間違い」についてだけです。たとえば、「あるはずです」を「あるのです」と読めば、「違います」と、すかさず声があがります。
- (6) 確かに、文字を正確に読むことは「音読」のポイントですが、厳密には音読以前の文字の読み方に関する指導事項です。
- (7) 奇妙なことに、音読は学年が上がるほど下手になる、という傾向さえあります。一、二年生は、元気な声で音読しているのに、五、六年生になると、ただぼそぼそした声で読んでいるだけ、という子どもが増えてきます。
- (8) 教育とは、子どもに向上的変容(成長)をもたらすことです。学年が進むほど音読が下手になるという状況に対して、教師は危機意識をもつべきです。
- (9) 「よりよい読み方を目指す」という目的意識をもたせよう

3. 音読法は指導されていない—指導のない音読は「学習活動」とは呼べない—

- (1) 私はつねづね、子どもの音読レベルがどうしてこれほど低いのか、疑問に思っていました。たまりかねて、子どもたちに「どうしてきみたちは、音読が下手なのだろうね。」と聞いたことがあります。
- (2) すると、子どもたちから「音読は、これまでたくさんしてきた。でも、音読の仕方を教えてくれた先生は一人もいなかった。」という答えが返ってきました。
それを聞いて、私はなるほど、と納得しました。
- (3) 漫然と読ませられることはあっても、望ましい音読とはどういうものか、具体的な指導を受けたことがない、というのです。
- (4) 「上手に読めたね」「もう少し練習するといいね」と批評する教師はいても、「どこがどのように上手か」「どの点が問題か」、それらを具体的に解説できる教師は少ないようです。
- (5) 音読指導を受けていない子どもに、音読の基本が身についていないのは当然です。
- (6) そもそも、子どもが下手な音読をしても、教師がその問題点に気づいていないことさえあります。
- (7) 私が授業参観であちこちの学校を回っていると、子どもの音読の後、それがたとえ好ましくないものであっても、機械的に拍手する教室さえあるのです。
- (8) 何気なく立ち、字を追い、声に出していただけなら、その音読は「学習活動」と呼ぶことはできません。
- (9) 「学習活動」とは、ある目的を掲げ、それを解決しようとして努力する活動のことです。
- (10) 音読を、漫然とするだけというただの「活動」から、子どもに向上的変容をもたらす「学習活動」に高めていかななくてはなりません。
- (11) 現在、ほとんどの音読が「学習活動」になっていない最大の理由は、教師の「指導」がないことです。指導とは、「きみの音読は、ここに問題がある」と「指」し、「このように読むとよい」とモデルや目標を示して、「導」くことです。
- (12) まずは、教師自身が、望ましい音読とはどういうものか、具体的にモデルを描けるようではなりません。そして、音読指導の重要性をあらためて認識し、基本に立ち返って、「何を指導すべきか」「どのようにすべきか」、それらを確認することが大切です。
- (13) 音読指導の基本をおさえよう

[コメント]

- (1) 「定着のための 3 大練習」として「音読練習」「書き取り練習」「計算・問題練習」を私があげさせていただいているのは、「練習は不可能を可能にする」、学力を向上させて人生の選択肢を大幅に広げるからだ。
- (2) では、「音読」練習はどのように行ったらよいのか。本書で野口先生が説かれる教室での音読指導の方法は具体的でわかりやすく、即、実行可能だ。
- (3) 「音読練習」が一番必要なのは「社会人」。次に必要なのは「中学生」「高校生」「大学生」だ。一度「うんなるほど」と十分に「理解」した内容を、野口先生の方法で「音読」練習をすれば、「中学生」「高校生」「大学生」「社会人」の学力はどんどん向上する。
- (4) 頭の中で「理解」したことも正確に身に着けなければ、誰もがすぐに忘れてしまうので学力にならない。定期テストで 100 点が取れない、合格点が取れない、社会で役立てることができない。
- (5) 教室で教える先生は国語だけでなくあらゆる科目で音読の仕方を見童、生徒、学生に教えるべきだという野口先生のお考えは正しい。

— 2014 年 1 月 6 日 林 明夫記 —